

次世代人文学開発センター

◇教員◇

文化交流学部門

教授：小島毅

准教授：芳賀京子

国際人文学部門

教授：向井留実子

特任助教：國木田大、一色大悟

人文情報学部門

教授：下田正弘、アルバート・チャールズ・ミュラー、鉄野昌弘（兼務）、武川正吾（兼務）、中村雄祐（兼務）

准教授：高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）、小林正人（兼務）

（１）次世代人文学開発センターについて

本センターの前身は昭和 41 年度に創設された「文化交流研究施設」で、地域間の文化の交流や異なった文化領域にわたる関与と展開について総合的な研究を行なうことを目的としていた。その後、昭和 49 年度からは 4 部門・1 資料室に再編され、平成 5 年度に朝鮮文化部門、平成 6 年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、それにともない「基礎理論部門」、

「朝鮮文化部門」、「東洋諸民族言語文化部門」の 3 部門からなる研究組織になった。平成 14 年度からは「朝鮮文化部門」が「韓国朝鮮文化専攻」として独立し、平成 14 年 7 月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設されるのにともない、「基礎理論」、「東洋諸民族言語文化」、「文化環境復元」の 3 部門による構成に改組された。そして、平成 17 年度から現在の名称となり、「先端構想部門」「創成部門」「萌芽部門」によって構成されていた。平成 30 年度から「文化交流学部門」「国際人文学部門」「人文情報学部門」に改組された。

センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。そのためセンターに籍を置く学生はいないが、授業等を通じて

教育も担当している。また、平成 27 年度から 29 年度までは集英社高度教養寄付講座が設けられていた。

(2) 次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、東洋文化研究所など、学内の独立した附属研究所と異なり、センターは人文社会系研究科・文学部に所属しつつ、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。

「文化交流学部門」：

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ないつつ、それらを公開発信していくことを目的とする。このため、専攻を異にする様々な分野の教授、准教授たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

「国際人文学部門」：

人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から多数の留学生が来て勉学に励んでいる。人文社会系研究科・文学部では原則として日本語により教育・研究が行われているため、留学生には高度な日本語運用能力が求められている。人文社会系研究科・文学部の国際交流室では、留学生を対象とする日本語教育の授業を開講して彼らの日本語学習を支援している。本部門にはその担当教員が所属し、日本語教育の方法について実践に基づく研究を行っている。

平成 27 年度から後期教養教育が開始された。人文社会系研究科・文学

部は、本郷キャンパスに所在する人文学教育部局としてこれに積極的に協力し、多くの授業を提供している。あわせて、外国の大学と提携してサマースクールなどのかたちで学生の国際交流を企画・実施している。これらの事業の円滑な遂行のために特任助教を置き、教養教育のあり方について研究を進めている。

また、平成 29 年 7 月から、東京大学総合図書館内に、学内 8 部局による連携研究機構として、ヒューマニティーズセンター（**Humanities Center: HMC**）が設置されている。HMC は、思想・歴史・言語・文学・教育・芸術・建築・生活等にわたる人文学及び隣接諸分野における卓越した研究者による部局横断的な新たな研究協創のプラットフォームである。その運営を人文社会系研究科・文学部として支援するため、特任助教を置いて国際的な連携協力などを担当している。

「人文情報学部門」：

人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学（**Digital Humanities**）として目指している。

平成 20 年 4 月に、当時の萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「大正新脩大蔵経次世代データベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の本格的模索がなされた。このうち前者は「大正新脩大蔵経次世代データベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成 25 年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門に移行した。平成 30 年度の改組に伴い、拠点の名称を部門名とするようになった。

（3）教員について

「文化交流学部門」：

平成 30 年度の本部門の教員は、小島毅教授、芳賀京子准教授である。本部門の前身である文化交流研究施設や先端構想部門には、複数分野や

多地域にまたがる研究を設立の趣旨としたにはこれまで専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任してきた。旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、美術史・考古学の青柳正規教授、西洋史の高山博助教授（西洋史学専修課程に異動）、美術史の小佐野重利教授を歴代主任として、現在の教員構成に至る。小島教授は東アジア海域の思想文化交流を専門とし、芳賀准教授は地中海域の形象文化交流を専門としている。

「国際人文学部門」：

平成 30 年度の本部門の教員は、向井留実子教授、國木田大特任助教、一色大悟特任助教である。

向井教授は国際交流室担当で外国人留学生への日本語教育を行っている。國木田特任助教は後期教養教育、一色特任助教はヒューマニティーズセンターの運営業務をそれぞれ担当している。

「人文情報学部門」：

人文情報学拠点発足以来、下田正弘教授を拠点長とし、アルバート・チャールズ・ミュラー教授のほか、兼務として鉄野昌弘教授（国文学）、武川正吾教授（社会学）、中村雄祐教授（文化資源学）高橋典幸准教授（日本史学）、高岸輝准教授（美術史）、小林正人准教授（言語学）が所属している。

（4）授業について

「文化交流学部門」：

平成 30 年度は、いずれも「共通講義」として「文化交流演習」・「文化交流特殊講義」を、小島毅教授が東アジア思想文化史、芳賀京子准教授が西洋古代美術史、非常勤の河村英和講師がヨーロッパ風景論の立場から開講している。このうち、小島教授の「文化交流特殊講義Ⅰ：日本のなかの中国文化」（A1+A2、火2、本郷開講）は「持ち出し専門科目」なので2年生も履修することができる。

「人文情報学部門」：

人文情報学部門が開講する科目は「人文情報学概論」「人文情報学特殊講義」で、「人文学フロンティア教育プログラム」に位置づけられ、文学部の各専攻の壁を超えて、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論」は全学大学院に向けて発信されるデジタルヒューマニティーズ教育プログラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。下田正弘教授らによる「人文情報学概論Ⅰ」（S1+S2）・「人文情報学概論Ⅱ」（A1+A2）、「人文情報学特殊講義」として平成30年度はチャールズ・ミュラー教授による

「Organizing and Analyzing Humanities Data with XML」（S1+S2）・

「Transforming XML Data with XSLT」（A1+A2）、中村雄祐教授らによる

「人文情報学の諸相」（A1）、小林正人准教授による「言語研究のための情報処理」（A1+A2）を開講し、今後の人文学に必須の教育を担当している。